國學院大學栃木短期大学
FD 委員会活動報告書　第 12 号

令和２（2020）年度の活動報告

1. オンライン授業の導入について　　2. 第１回研修会　　3. 第２回研修会
4. 授業アンケート　　5. FD 委員会活動記録

1.オンライン授業の導入について

教務副委員長　菱沼一憲

本学では、新規感染者の急増・コロナ禍に伴い昨年４月より Google Classroom を利用したオンライン授業が導入された。新学期の開始と同時であったため、教員・学生ともに準備が不充分で、４月中はオンライン授業と既存の学務システムを通じて課題を与える課題型授業を併存させることとし、本格的な運用は５月となった。５月中は対面授業（面接授業）を停止し、オンライン授業と課題型授業を行ったが、６月からは感染状況の改善により、対面授業とオンライン授業を併用することとなった。この後も、緊急事態宣言発出などの状況の変化から、適宜、対面授業の停止・全面的オンライン授業への転換など困難な対応にせまられた。

オンライン授業の運用にあたっては、教員・学生への Gmail アカウントの配布、教員による授業 Classroom の作成、学生への授業 Classroom のクラスコード一覧の配信、履修授業 Classroom への学生の参加といった手順で準備が進められた。この Classroom とは Google の提供する授業運営を一括管理できるツールで、ビデオ会議（Meet）、課題・成績管理、一斉連絡などの機能を備えており、本学では既存の学務システムに加え、このソフトを利用してオンライン授業を行った。

オンライン授業の導入にあたっては、当然、たくさんの障害に直面した。まず運用する教員と、受講する学生の技能の問題である。パソコン・インターネットに精通する教員・学生はごく一部であり、多くは Classroom の利用・習熟に大きな負担を強いられることとなった。学校からは各教員にノートパソコン１台が支給されていたが、普段からそれすら利用していない教員もおり、教員向けの講習会を複数回設けるとともに解説動画をアップし、またフィールド単位でサポート教員をもうけた。学生についても講習会・解説動画を準備し、コンピュータ技士が電話相談を行うなど細部にわたるサポートが必要となった。また自宅のパソコン・フリーWi-Fi 等の設備の状況により、受講環境が大きく左右され学修にも大きな不平等が生じかねない。このため、学生に対し、通信状況やプリンターの有無などのアンケート調査を実施し、学校施設を部分的に開放するなどの対策を講じた。

そもそもオンライン授業の導入にあたっては、全ての学生が平等に学修を享受できることが前提であり、Gmail アカウントが作れない、パソコンがない、フリーWi-Fi がないなど個別の様々な障害が生じ、それらに対処しつつ通常の授業に近い授業環境を整えてゆくのには、膨大な労力を要した。導入にあたっては、教務委員会・教務課・コンピュータ技士が連携して進めたが、ご協力いただいた教職員はもとより、不慣れな学習環境にも負けずに取り組んでくれた学生にも感謝したい。

確かにコロナ禍によるオンライン授業の導入は、大きな負担を強いるものであったが、学修の ICT 化を一挙に進めたことは紛れもない成果である。大いなる犠牲の上での成果でもあり、これを今後どう活用してゆくかは、犠牲を払ってくれた人々への義務でもあろう。

2. 第１回研修会　令和２（2020）年　６月３日（水）実施

オンライン研修会

『遠隔授業実施に向けて』

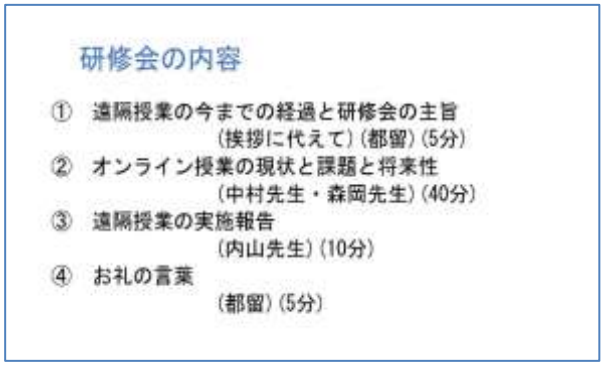
本学准教授　中村耕作　　本学准教授　森岡宏行　　本学専任講師　内山京子

令和元年度末から、COVID-19 の感染拡大による世界的なパンデミックの影響により、教育機関の活動停止が相次ぐこととなりました。令和 2 年度は、学年開始時期から公立小学校・中学校・高等学校の休学が始まり、本学も休学せざるを得ない状況となりました。

国難とも言えるこの状況において、学生達の教育の機会と学びを保証するためには、早期の遠隔授業の充実が最重要課題となりました。

しかし、遠隔授業の利用が普及していない現状では、遠隔授業の利用方法・効果と注意点等について、非常勤講師を含む授業に関わる全教職員の研修が必須となりました。

そこで、短大全教職員及び非常勤講師全員を対象に「遠隔授業実施に向けて」研修会を次のように実施しました。



教育者は、パンデミックの中においても、近い未来（With コロナ）と遠い未来（After　コロナ）を見据えていなければなりません。

今後、授業を成立させるためには、徹底した感染予防対策と遠隔授業についての課題解決であろうと考えられます。

多くの大学で、ソサエティー5.0 の社会へ対応しつつ、ICT 活用、IoT 対応、AI の活用に向かって、遠隔を突破口として、改革に取り組もうとする動きが増えてきました。新型コロナウイルスの蔓延を契機とした大学改革の動きが加速しそうな状況です。各地の大学で遠隔授業の利用拡大と効果的な利用方法の開発に向かって本格的な授業改善の動きも始まっています。

ネット環境を構築し、授業の録画映像を何度も見ながら復習でき、体調不良であっても自宅で Live 授業に出席でき、受講生や担当教員が登校できなくても学びを進めることができる。また、他大学の優れた先生方と連携して共同授業を展開したり、一人ひとりの学生の作品やレポートを自動的に集積・管理して指導・評価したり、シラバスや成績処理をいつでも・どこでも作成して配信することができる。そんな世界が、すぐそこまで来ています。

振り返って、本学の状況を考えると、どこの大学においてもそうであるように、遠隔授業実施と充実に必要な物的環境・人的環境の不備と不足は否めません。早急の対応が必要です。

本研修会では、授業の効果と成果の保障に向かって努力することや本学教職員が一丸となって取り組むことが必要であることを共通理解し、努力していくことを確認しました。

（文責　都留　覚）

3. 第２回研修会　令和３（2021）年１月 20 日（水）実施

オンライン講演会

『視覚障害の学生のための遠隔授業―遠隔授業の技術的課題を見据えて―』

筑波技術大学　保健科学部情報システム学科講師　堀江則之先生

１．筑波技術大学での教育の概要と遠隔授業の現況

同大学は、聴覚障害学生が学ぶ産業技術学部と、視覚障害学生が学ぶ保健科学部とから成り、先生は後者の中の情報システム学科に勤務する。同学科には学生 44 名が在籍し、教職員 12 名が指導に当たる。学生は工学士取得を目指し、IT（システムエンジニア）や管理（一般事務職）部門への就職を目標とする。

令和２年度は、感染症の影響で１学期は５月 11 日より、２学期は９月１日より、Zoom 使用の遠隔授業となる。ツールとして、弱視者用の「Windows 拡大鏡」、全盲者向けの「スクリーンリーダー」、他に「点字 PDA」や「ブレイルセンス」、聴覚障害学生の受講時には「要約筆記システム」等、目的に応じて多様なツールを使い分ける。

テキストや資料は、全盲者へはテキストファイルやワードやエクセルで提供する。パワーポイントは、画像のみでは不足なので文字情報をテキストファイル化する。弱視者への資料では文字サイズに注意する（18 または 24 ポイント）。映像・画像の口頭説明の際は、「あれ」「それ」等の代名詞を使わず具体的説明を心がける。

２．遠隔授業の一般的技術的課題とそれへの対応

（１）遠隔授業および遠隔試験の問題点

演習主体の授業は遠隔では難しい。対話が困難で学生を動かしにくいため、工夫が必要。インターネットや情報機器の環境も、学生と教員双方の問題である。タイピング能力等の IT リテラシーの成熟度も問題。リアルタイムな情報の発信を心がけ、口頭説明と同時に、学生の理解を配慮して、ワードやスライドでの表示を行っている。

同様のことが遠隔試験の際も問題となる。インターネットと情報機器の状態、IT リテラシーの成熟度が試験に影響する。カンニング対策も大きな課題。その対策が万全の遠隔試験は現状では困難である。実施方法として、①Classroom 利用の筆記試験、②Classroom 利用の遠隔試験、③Google Meet 利用の遠隔試験、が考えられる。①の試験の実際例としては、「学生への事前の告知……問題・解答用紙を PDF で用意→試験実施→撮影して画像で提出」という形が想定できる。試験中は Meet を使って「カメラオン」にすれば、カンニング防止にある程度は役立つ。また、③は発表形式の試験ならば可能だろう。

（２）遠隔授業の今後の展望

先ず、遠隔授業の録画やオンデマンド教材等の資源化が重要。学生の知識と技能向上のためにこれらを積極的に活用すべき。そのために、録画データの保存、Google Drive のバージョンアップ、ネットワークドライブや学務システムの活用等の課題がある。また、学生のパソコン所有・インターネット環境・プリンターの有無等も大事なポイントである。これらの機器や設備の購入や学生への貸与は簡単ではない。従って、今後は当面、「機器・設備の十分な学生には遠隔授業、そうでない学生には対面授業、授業の予習・復習として両者ともにオンデマンド授業を活用」という組み合わせ授業が考えられる。感染症終息後もこれは利用可能ではないか。

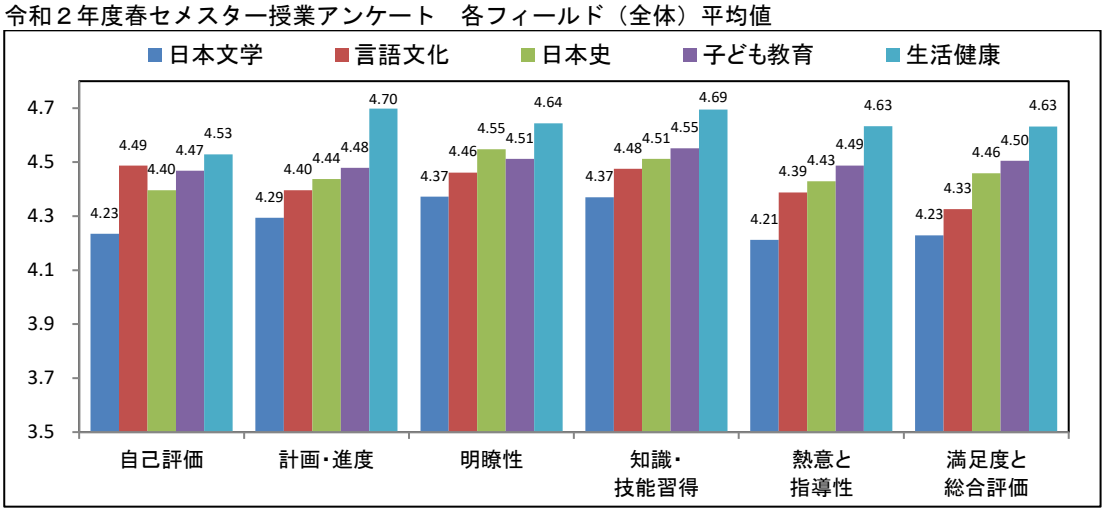
今後の大学教育の中で、パソコンやインターネット等の ICT は、専門分野以外の教養として必須のものとなる。そのバージョンアップが喫緊の課題。常に時代の先を見越して、環境の変化に備えることが大切。学校では、対面・遠隔・オムニバスを組み合わせた柔軟な授業模索の継続が重要である、として先生は講演をまとめられた。

また、本学実施の「授業アンケート」への具体的な改善策を提示していただいた。御助言の活用を検討したい。（文章のまとめ　田村浩一）

情報処理室で講演中の堀江則之先生

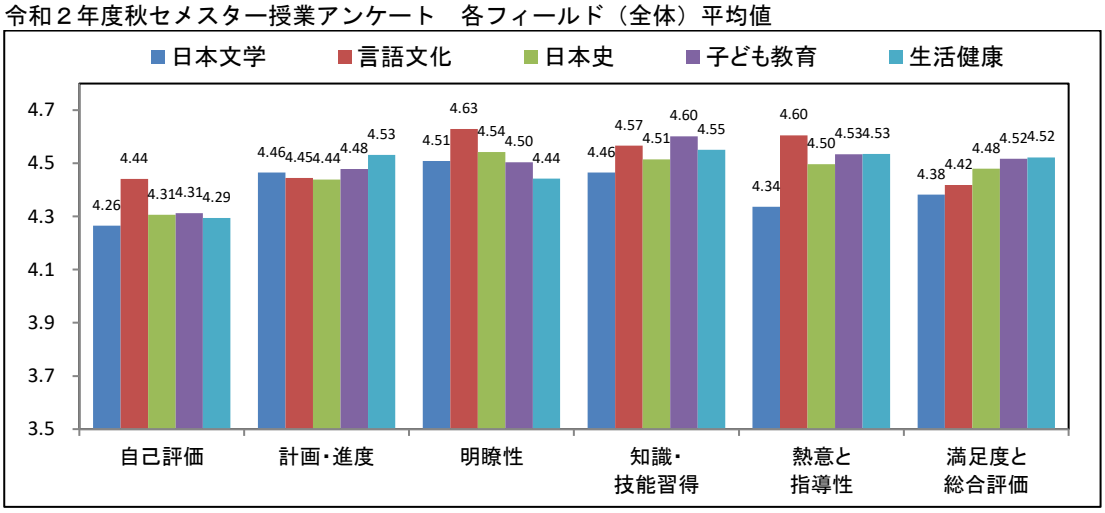
4. 令和２（2020）年度授業アンケート

令和２年度春セメスター授業アンケート　各フィールド（全体）平均値



※回答者数
日文：379
言語：396
日本史：408
子ども：589
生活健康：376

令和２年度秋セメスター授業アンケート　各フィールド（全体）平均値



※回答者数
日文：185
言語：220
日本史：305
子ども：373
生活健康：450

（グラフ作成：森岡宏行准教授）

※グラフの見方
①横軸：アンケートの諸項目を 6 つに分類、棒グラフの数値は各項目の平均値　②縦軸：アンケートの各項目の評価点（5.0 満点）

授業アンケートの結果と分析

令和２年度の授業アンケートの回答者は、春セメスターは 2148 人（昨年 2851 人）、秋セメスターは 1533 人（昨年 2133 人）であった。オンラインによる実施が初めてであったせいか、同一科目で同一学生が複数回の回答をした例が春に多く見られたため、秋にはその点に注意を促したことが、春と秋の回答者数の較差として表れたと思われる。春の総平均は 4.46（昨年 4.15）で、秋は 4.45（昨年 4.12）と、評価は総体的に高い。平均で４を下回る項目がないのも例年にないことである。紙での提出と異なり、実施環境に制約が少ないことが、逆に回答者数を引き下げた要因となったと考えられる。高評価と回答者数の減少とに相関があるとすれば、それを断ち切る方策を見つけることが今後の課題のひとつになるだろう。

5. 令和２（2020）年度 FD 委員会活動記録

（1）定例委員会

第 1 回 FD 委員会：令和２年５月　6　日
第 2 回 FD 委員会：令和２年６月 17　日
第 3 回 FD 委員会：令和２年７月 15　日
第 4 回 FD 委員会：令和２年８月　5　日
第 5 回 FD 委員会：令和２年９月 23　日
第 6 回 FD 委員会：令和２年 11 月 18　日
第 7 回 FD 委員会：令和３年１月 10　日

（2）研修会

第 1 回 FD・SD 研修会：令和２年６月　3 日
第 2 回 FD・SD 研修会：令和３年１月 20 日

令和２（2020）年度
國學院大學栃木短期大学 FD 委員会活動報告書 第 12 号
令和３（2021）年　5 月 31 日発行
編集：國學院大學栃木短期大学 FD 委員会